

後輩を育てる 動物病院の フレーム ワーク

第 29 回
現場レポート：日本小動物医療センター
動物夜間救急診療センター
救急の現場で育てる
“直感力・判断力・決断力”



田中理咲
RISA TANAKA

動物病院ヒューマンスキル育成コンサルタント、ZERO接遇講師、航空会社勤務で培った接遇力、研修講師として蓄積した人材育成スキルをベースに、動物病院の抱えるさまざまな課題を「スタッフ一人一人の力の最大化」で解決に導く。動物病院に特化したプログラム開発、体験型研修で「変わるを楽しむ」人材を育成する。

お知らせ

今年5月に配信された、田中理咲先生の「最速で信頼される獣医師になるためのマナー&コミュニケーション」の動画は、下記URL、QRコードから閲覧できます。新人教育にぜひご活用ください。

① 獣医師として信頼される第一印象
<https://e-lephant.tv/ad/2001059/>



② 獣医師として信頼される聴き方
<https://e-lephant.tv/ad/2001061/>



③ 獣医師として信頼される言葉遣い
<https://e-lephant.tv/ad/2001060/>



④ 獣医師として信頼される話し方
<https://e-lephant.tv/ad/2001062/>



はじめに

「獣医師として臨床を続けていく上で、救急の現場は経験しておきたい」とお考えの方も多いのではないのでしょうか。

今回、取材にご協力くださった公益財団法人 日本小動物医療センター（埼玉県所沢市）が有する「動物夜間救急診療センター」にも、夜間救急診療専任獣医師（フルタイム）として、また夜間救急診療非常勤獣医師（パートタイム）として、夜間救急の現場を学ぶ獣医師の方たちがいます。

夜間救急診療の主任として彼らの指導にあたるのが、森田 肇先生。『何が何でも命をつなぐ。自分や大切な人が救急にかかったときに、“してもらいたいこと”をする』という救急診療に対する“熱い想い”をもつ森田先生は、後進の指導にも熱く、『救急対応に強い人を育てる』という理念のもと、時間、労力を惜しまず指導にあたられています。

今回は、夜間救急の現場で特に必要とされる力は何なのか？そして、その力を習得、発揮していくためにどのような育成、サポートを行っているのか？について、じっくりとレポートしたいと思います。

病院DATA

- 病院名：公益財団法人 日本小動物医療センター
動物夜間救急診療センター
- スタッフ（夜間救急専任）構成（図1）：
獣医師：13名（非常勤含む）、動物看護師：12名（非常勤含む）（2021年8月現在）
- 病院HP
<https://jsamc.jp/services/yakan.html>

夜間救急の現場で 動物と飼い主と向き合う

同センターの診療は、21時から翌朝5時まで。獣医師約4名体制で診察室はフル稼働という日も少なくはないそうです。軽症例から重症例まで徴候はさまざまですが、一次診療に比べれば「切迫したケース」も当然多くなります。今、何かしなければ、今、飼い主が決断しなければ命を落とすという重症の動物もいる中で、結果を左右するのは「診療技術」だけではないことを、インタビューの中で実感しました。『飼い主とのコミュニケーション』もまた、夜間救急という特性をふまえたものである必要があるようです。

図1 今回お話を伺った先生



森田 肇 先生

動物夜間救急診療センター 主任

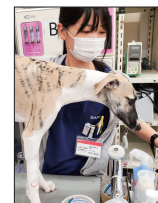
一次診療施設で5年の臨床経験を積んだ後、日本小動物医療センター消化器科および動物夜間救急診療センターで診療を行う。臨床10年目の現在は、動物夜間救急診療センター主任として診療と後進育成の中枢を担い活躍する。また、病院の垣根を越え、救急を学べる場として Facebook グループ「ANIMAL Emergency Room（動物救急救命室）」を主宰し、情報を広く発信している。



加地英樹 先生

夜間専任常勤獣医師

大学では循環器を専攻。新卒で勤務した一次診療施設では緊急疾患の治療にあたることも多く、興味は自然と救急へ。将来の開業時にも救急の知識は必要と考え、夜間救急の現場に移って3年。現在は後進の育成にも力を注ぐ。



今井彩加 先生

夜間専任常勤獣医師

大学卒業後、一次診療施設で3年半の臨床経験を積む。獣医師2名の動物病院であったため「自分1人でも重症症例に対応できる力を習得し、一次診療に持ち帰りたい」と、夜間救急の現場へ来て丸1年。平行して、日本小動物医療センターの画像診断科でも研修中。

同センター主任の森田先生はこう話します。「一次診療では、長く付き合っていくことをふまえた関係作りが必要だと思うんですね。些細な生活環境やさまざまな事情についても聞くでしょう。そんな中で『お互いに話しやすい関係』を作っていきますよね。でも僕は、夜間救急では最終的に『こんなにはっきり言ってくれる先生でよかった』と言ってもらえればよいと思っています。だから仲よくなるための笑顔は作らないし、正直嫌われたとしても動物が助かればよいという覚悟でやっていま

す。『このコを助けるためには、もうこれしかないです』『今やらないと、命にかかわるからやらせてください』など、きついことも隠さずに言うようにしています」（森田先生）。

短時間で判断を下さなければならないのは、獣医師も飼い主も同じ。だからこそ、飼い主が事実に基づき、適切な判断ができるようストレートな表現、率直なコミュニケーションをあえて選択しているということです。これもまた「本質的なところで相手視点なのだ」と感じま